

**令和6年度地域づくり人材の養成に関する調査研究会
(第1回) 議事概要**

○日時

令和6年9月18日(水) 14時00分～16時00分

○会場

総務省9階902会議室

○出席者

大杉構座長、河井構成員、吉弘構成員

(オンライン参加) 小田構成員、加留部構成員、島田構成員

(事務局)

近藤人材力活性化・連携交流室長、横張地域支援専門官、大野事務官、(株)OMC 山崎

【議事次第】

(1) 審議

①今年度審議依頼事項

②総務省施策(外部人材活用体系等)

③各構成員からのご発言(審議事項に関連した最近の取組)

④調査の進め方、スケジュール

(2) その他

【議事概要】

今年度審議依頼事項

○今年度のテーマを「外部人材の活用に関する調査研究」とし、本調査研究においては、外部人材の活用方法や、活用に関する事前準備からアフターケアまでの対応支援、人材支援、人材支援制度の活用等の調査・分析をすることにより、先進的な活用事例の横展開、現在の人材支援制度へのフィードバックを行う旨を事務局より説明。

○調査対象地域の選定に関して自治体ベースで3種に分類されているように見えるが、自治体が絡まずに外部人材が地域を盛り上げている事例も多い。そうした点では、総務省の人材支援制度を使用していない事例も含めたほうがより新しい発見につながると思う。また、移住・定住の観点において、当初から意図したものでなく結果として結びついたのはなぜかという視点の調査も含めていいのではないか。(河井構成員、島田構成員)
→自治体の関与が必須ではなく、自治体が絡まずとも外部人材を活用するケースも当然

候補として検討する。また総務省の施策以外でも好事例があれば把握したい。調査事項に関しては、回答者が中間的・段階的な様々な成果・効果・影響も記載してよいとわかるよう、調査票を工夫する旨を事務局より回答。

○分類に関して、3種のパターンだけでなく、それぞれタグづけがあるとよい。例えば、それぞれにリターンの人たちが絡むもの、Iターンが絡むもの、有識者の人が入っているものといった様々なタグを用意しておくところからタグ引きができて非常に利用しやすい資料になる。また、報告書等は、紙も大事だがオンライン上にあると使いやすい。タグをタップすると、そこに関わる事例が出てくるといった仕掛けも実運用では有効。

○外部人材に対する調査に関して、一般的には活動の苦勞・反省・改善点を問うと思うが、工夫点・独自性を生かした成功点を伺い、ポジティブサイドでの知見を得ることが重要。→調査項目に加える。

総務省施策説明（外部人材活用体系等）

○総務省施策を事務局より説明。

各構成員ご発言（審議事項に関連した最近の取組）

（１）河井構成員

○基本的には、時々アップデートに際して関わりを持つ取組が多く、シティプロモーション・観光・デジタルにおいて自身の専門性を活用いただいている。具体的には筑西市、富士市、名張市、奥出雲町、香取市といった市町村との関わりがある。

○奥出雲町においては「地域の人図鑑」といったものの作成を考えている。人が関わりを持つ際、行政しか知り合いがない場合には取りかかりにおいて困難が生じる。地域にどのような人がいるかは非常に大事であり、どのような形であればつながれるのかといった視点は重要と考える。町の小さなキーパーソンとの繋がりが行政等を通じて行える仕掛けづくりを構想している。この流れが奥出雲町にて出始めている。面白い町であり、様々な形に展開が可能と思い、興味深い事例として共有したい。

○私としては中核ではない人材が重要であり、実はそうした者が地域内のネットワークを持つと考えている。地域は小さなエピソードの連続だ。そのようなエピソードをしっかりと拾っていくような仕掛けは政策としては難しいと思うが、地域の中でそういった関係

性を支えられるような仕掛けをつくるといった発想はありだと思う。

（２）吉弘構成員

○基本的には、ワンポイントリリーフ型であり、地域よりも自治体の中に入りながら職員の育成等を主に取り組んでいる。行政の現場に長くいた経験から、政策アドバイス、職員の人材育成を目的とした地域力創造アドバイザーの活用を希望されることが多い。

○審議事項に関連するものとして、私が西日本新聞に２０２２年より２年間、毎週寄稿していたものから４点紹介する。まず１点目は山形県西川町。人口約４，４００人の町だが、外部人材として、地域力創造アドバイザー、地域活性化起業人を含め、多数委嘱している。４４歳の町長を筆頭に課・組織編成を変え、「かせぐ課」、「つなぐ課」を設け、地域おこし協力隊やふるさと財団の取組も積極的に活用し、全国から注目されている。

○２点目は埼玉県三芳町元町職員の佐久間智之氏の取り組み。外部人材の単発として助言、広報、SNS 研修、YouTube番組等の取組を行っている。地域によっては単発だけでなく、地域力創造アドバイザー制度を活用した取組も行っている。

○３点目は島根県邑南町。地域力創造アドバイザーである元商工観光課長の寺本英仁氏はNHK「プロフェッショナル」にも出演した。５０歳で退職後、邑南町に定住しながら全国各地の自治体に入り、様々な地域の特産品を「Ａ級グルメ」として日本のみならず、世界に発信している。邑南町では「耕すシェフ」といった制度も構築された。

○４点目は高知県高知市。地域おこし協力隊（地域づくりのヒーロー）の吉田友一氏は、「特捜戦隊デカレンジャー」に出演した経験がある。市役所にて協力隊勤務のほか、鍼灸師としての活動も行いながら、俳優としての経験も活かし特捜戦隊の２０周年映画を高知県内で撮影するなど、地域づくりを行う取組を実践中。協力隊のあり方が変化したともいえ、市がガバメントクラウドファンディングを実施する中、目標額２００万円をはるかに超える規模の金額が集まった。

○現場からの声は、コロナ禍を経て変化している。職員数が減り、採用が思うようにいかない。特に、地域づくり人材育成を担当する者が減っている。キャリアチェンジ、転職が頻繁な昨今、人材育成の不足の声が自治体等の現場から上げられている。全体的な立て直しが必要との声もある。私としては、現場でキャリアを変えている方のニーズが非常に重要と感じる。一人一人に寄り添う人事、キャリア支援を手厚くすることを求めたい。

○最後に、少子高齢化においては地方公共団体のみでの意識解決は難しく、官民連携、外部人材の活用、企業との連携が欠かせない。地域力創造アドバイザー制度に関しても、現行制度は3年間の制限がある。平成20年度以降、多くの自治体に活用されている現状においては、地域格差が生まれないためにも、再度活用できるようにすべきフェーズに来ている。

(3) 小田構成員

○自身の関わりとしては、行政側の支援業務が非常に多い。外部人材との関わりを行政側の視点で実行中であり、令和6年度から愛媛県「デジタル人材シェアリング事業」を受託した。本件について昨年までは専門官だったが、事業全体を管轄する立場となった。

○上記事業の目的は、デジタル系の人材確保が難しい点により、愛媛県の全20市町が共同し、人材確保及び外部人材の活用をするといったもの。3名の専門官が月当たり20時間から100時間ほど稼働し、外部人材の活用が不慣れな点に対し、課題等を丁寧に対処しながら伴走中である。また、この事業に伴い私は松山市民となった。現在は松山市に借家を持ち、2拠点活動中。当初から意図していたものではないが、活動する中でその選択に至った。

○一方、事業運営において、異なる地域性である20市町を横串で通し、同じ仕組み、同じ人材で行っている点では課題を感じている。私としては、人的依存をせず、仕組み及び制度で対処したいと考えるのだが、現在試行錯誤中である。また、職員リソース不足も強く感じる。特に人口が少ない自治体に関しては、1人の職員が多くを担当していることから手が空かない。そうした点では横連携を行うしかないが、国境のように市境が引かれている在り方において非常に難しさがある。

○最後に、審議事項に関連するものとして2点推薦する。1点目は福岡県赤村であり、地域プロジェクトマネージャーの仕組みができた際に一番手で名乗り出た点で興味深い。2点目は三重県いなべ市であり、地域活性化企業人を非常に積極的に活用している点で関心を持つ。キーワードとしては、「挑戦する、やってみる」ということが重要と考え、自治体がそこに踏み込めるかということがキーポイントになるのではないかと考える。

(4) 加留部構成員

○関わりとしては行政側が多く、オーダーとしては、ファシリテーションを生かす、会議体・ワークショップ等の場を通じた支援、関わり持つことが圧倒的に多い。地域づくりの伴走支援に関しては1年から4年程度共に行うケースが多い。

○具体的な関わりとしては、兵庫県朝来市にて総合戦略の見直しのため、「あさご未来会議」に6年。佐賀県小城市においては「総合計画」策定のためのアドバイザーとして現在、1年間伴走中。同市の芦刈地区が過疎地域指定を受けたことから、どうすべきかを住民と検討中であり、まちづくり協議会を立ち上げた。

○ファシリテーション業界の話題としては、兵庫県明石市が注目されている。ファシリテーション人材を募集し、本年4月から職員が2人採用された。谷内氏（石川県出身）が任命され、内外の場づくりを行っている。直接・間接として、どのような影響をもたらすかを業界として注視しているところ。

○最後に私の現状だが、今3拠点生活（①福岡の自宅、②妻が所持する佐賀市の家、③取得した佐賀の山にある築30年の家）を行っている。③は人口900人を切る広域限界集落であり、大字松瀬、梅野、名尾の3エリアで構成される佐賀市内で2番目に人口の少ない地域。③の拠点を「サード&フォースプレイスパーク」といった位置づけにし、名称は「松梅ランチ」とした。昨年にリノベーションを行い、今年の正月よりオープン。補助金は一切受けていない。「地域の暮らし・対話と学び・社会活動」の混ざり合った場所をコンセプトにしている。

○土日祝に山に上がり、松梅ランチを開放し、地域の方が気軽に来られるようにしている。7月には親子写真教室を行った。また、体育祭後のカフェ使用をはじめ、地域の方々からの依頼に応じている。敬老会にも入り、自身を「協働人口」として捉えている。拠点を開放する中で仲間が集まり、そうした方々が、気づけば地域づくり人材につながっていくと感じている。

（5）島田構成員

○仕事は、講演・講師・トレーニングデザインが主となる。企業や行政に対するチームづくり、組織づくり、ウェルビーイングに関する講演が多い。昨年より、地域活性化センター経由にて鹿児島県庁でのマインドフルネスの研修、講習を行っている。

○「1次産業ワーケーション」を商標登録し、それをキーワードにした取組として、和歌山県みなべ町を中心に「梅収穫ワーケーション」を行っている。この取組は3年目となるが、その派生として、三重県にてミカン・甘夏・柿で行ってほしいとの依頼を受けた。それにより御浜町、尾鷲市、伊勢市にて実施中。また、三重県庁が3つのワーケーションを県職員の研修に当てると決めた。これは全て無料で行っている。

○梅収穫ワーケーションから派生した他の取組として、自然の中で1次産業に没入する時

間が脳に与える効果、ウェルビーイングの観点を柱とする思想を大切にした研修「TUNAGU」を実施中。研修体験後の業務に対する集中力アップ、パフォーマンス向上、自律した人生を送る決断につながるといったコンセプトの下、昨年4地域からスタート。現在、和歌山県みなべ町、すさみ町、石川県能登町、福井県高浜町、三重県尾鷲市、富山県魚津市の6地域と深く関わっている状況。みなべ町に関しては、古民家を購入し、コワーキングスペース及び宿泊所としてリノベーションを行い、様々な会議を行える場所として使用中。今年は2つある蔵を工事し、昼夜コンセプトを変えた形でカフェ活用するといった構想がある。

○審議事項に関して4点紹介する。まず1点目は香川県三豊市だが、知人の古田秘馬氏がクリエイターとして関わったことにより、大きなイノベーションが起きている。地元事業者の2代目、3代目が自ら「住みたいまちづくり」として動き出し、それに魅力を感じた外部の若手が移住及び事業を始めている。

○2点目は和歌山県すさみ町になる。人口3,600ほどの漁師町だが、社会増が非常に増えている。若手移住者が店を持ち、新たな事業を始める動きが増えている点で一つの事例になる。制度ではなく、人の魅力が起こす変化は焦点になると思う。

○3点目は福井県高浜町になる。一度町に訪れた外部の者がリピートしやすくする制度を設け、宿泊補助、交通費補助を行っている。アンバサダーといった名前をつけるなど、自治体の参考例になると思う。

○4点目は三重県尾鷲市になる。地域おこし協力隊の強固なネットワークが構築されている。卒業生たちの移住及び新たに入られた者のコミュニティにおける活性、年代を超えたコミュニティづくりがもたらす町への影響といった視点も面白いと思う。

(6) 大杉座長

○一行政学者として、地域との関わりは行政を通じた間接的な形になるが、非常勤職員として世田谷区の参与に関わっている。アドバイザーを幾つか兼任する中、人材育成において香川県の県・市町村で職員研修を行い、コメンテーター等の形で様々な地域に入っている。

○昨年度、本研究会でさぬき市津田地区に伺ったが、今年度は現地視察を県・市町の職員と共に行った。また、協力隊に関して、高松市内の塩江地区において厳しい状況があると伺っている。外部人材がどのようなやり方を取るべきかといった面で、様々な考えさせられている状況だ。

○審議事項に関する推薦としては、新潟県十日町市を挙げる。「里山プロジェクト」は非常に有名であり、特に十日町市の松代地区に多くの協力隊が入っている。一昨年度、私の関わる世田谷区から若者が十日町市に行ったのだが、現在は地域おこし協力隊員になっている。当初から地域おこし協力隊員を希望していたかどうかは定かでないが、目的は棚田の整理を行いたいとのことだった。また、棚田に関しては、ホテル経営等を様々行っていた者がリタイア後に棚田経営をするといった地域全体として棚田の動きに関わっていた者がいる。そうした目線から取り上げるのも面白いと思う。

○調査手法の観点としては、スノーボールサンプリングが一つ考えられる。我々が最初から全員を知ることは難しい。そうした点で、まず1人に当たり、その人からまた紹介されるといった手法で調査を行う。根っこを続けて引っ張っていく点に意識しながら調査に入るのも必要。

| | |---------------| | 調査の進め方、スケジュール | |---------------|

○調査の進め方、スケジュールを事務局より説明。

以上